【4】

氏　名（本籍）	林（はやし）　洋輔（ようすけ）（島根県）
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博　甲　第　6280　号
学位授与年月日	平成24年4月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**デカルト哲学における「身体教育」への指標** －心身関係論を機軸として－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	佐藤臣彦
副　査	筑波大学教授	教育学博士	清水　諭
副　査	筑波大学准教授	博士（体育科学）	酒井利信
副　査	筑波大学教授	博士（文学）、Ph. D.	谷川多佳子

論文の内容の要旨

（研究の目的と方法）

本研究は、従来の体育学分野における「デカルト批判」の文献学的、論理的問題点を明確にしつつ、デカルト原典（ラテン語、フランス語）を読みこなしながら、心身関係論を機軸として、デカルト思想における教育論の可能性、さらには身体教育論の可能性を論理づけようとするものである。そのため、「心身関係の基礎づけのもと、人間はどのようにして文化的な身体諸動作を身につけるのか」という問いを提起し、書簡をも含めたデカルト著作全体を視野に置きつつ、体育哲学の視点から、これまで等閑に付されてきた論点（「自然存在としての人体」「身体における完全性」「身体諸動作の社会的育成」など）を明示化することで、デカルト哲学思想に基づく「身体教育論」の理論的基礎づけを試みている。

（論文構成と概要）

全体の構成は、序章：予備的な考察（①序と問題の提起、②デカルト教育論への可能性、③本研究の構造と課題）、第1章：人間存在における心身関係の理論的前提（①心身の存在論、②心身接続の諸原理、③経験世界とデカルトの心身論）、第2章：自然学的存在としての「人体」（序節：デカルトと人体、①人体における「可分性」、②人体における「形状性」、③人体における「運動性」）、第3章：デカルト哲学と「身体教育」における諸契機（序節：視座的な諸問題とその突破、①デカルトにおける「身体教育」、②身体諸動作の改変、③理性、言語、そして他者）、および「結章」となっている。

論文概要であるが、序章における予備的考察によって本研究の構造と課題が提示された後、第1章では、デカルトにおける心身関係について、厳密な形而上学的論議における「心身関係論」、すなわち、非物質である「精神」と物質である「身体」がともに実体 substantia という身分のまま不可分に結合する「実体の合一 unio substantialis」が人間における心身のありようであるとする形而上学的テーゼと、日常の経験世界における心身接続としての「心身の合一 union de l'âme et du corps」とが区別されて展開されていることを明らかにし、後者において後天的な教育が成立する論理的根拠を見いだせるとしている。第2章では、デカルトにおける corpus 概念について、自然的存在としての「人体」及び後天的に形成される「身体」という枠組みを設定したうえで、前者の「人体」を「可分性」「形状性」「運動性」から考察している。その結果、自然

的実体としての「人体」は、「空間的な充実性」「合理的な組織性」「諸感覚の誘起性」といった特質を有する物理的物体とみなされていることを明らかにしている。第3章では、「心身合一体」である「身体」が、物理的物体としての自然的性質（人体）に加え、社会的関係性のなかで変容しうる「可変性」を有するという仮説のもと、身体教育概念を構成する諸契機について考察している。まず、身体教育の概念的枠組みについて、デカルトのテキストに基づきながら、「善」としての「身体の完全性 la perfection du corps」を目的的契機とする「社会的関係性のなかでの身体運動文化の遂行」という図式を抽出している。さらに「習性 l'habitude」を通じて身体諸動作を後天的に変化させ得る生理学的根拠を提示するとともに、『情念論』を主要テキストとして「他者関係」に関するデカルトの主張を再構成することで、デカルト哲学に基づく「身体教育論」の可能性を論拠づけている。

審査の結果の要旨

本研究の意義は、まず、従来、体育学の分野において論難の対象としてのみ取り扱われてきたデカルト哲学における「心身（二元）論」について、デカルト自身のテキストに厳格に基づきつつ総体的な論理構造を明らかにしたこと、さらには直接には論じられていないデカルトにおける「身体教育論」の可能性について、デカルト自身のテキストを体育哲学的視点から捉え直すことでその理論的な基礎づけを提示し得たことにあると言える。こうした理論的な試みについては、デカルト研究を専門とする副査からも高く評価され、デカルト研究に十分資するものであるとの認定を得た。本研究の成果は、従来の体育学分野における安易なデカルト批判を一蹴するとともに、体育概念研究への理論的基礎を提示しうるものとして学術的価値は高く、学位論文として十分水準に達していると評価された。

平成24年2月23日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。